医療福祉の文脈におけるスピリチュアルケア(Spiritual Care)の射程

古澤有峰

〈書評論文の対象文献〉
Aru NARAYANASAMY, *Spiritual Care: A Practical Guide For Nurses And Health Care Practitioners*, Quay Books, 2001. Mark COBB, *The Dying Soul: Spiritual Care At The End of Life*, Open University Press (McGraw-Hill Education), 2001. Dorothy L. WILT, Carol J. SMUCKER, *Nursing The Spirit: The Art And Science Of Applying Spiritual Care*, American Nurses Association, 2001.

本稿においては、医療福祉の文脈における、特に英語圏でのスピリチュアルケアの動向について記された文献3冊を取り上げる。多くの人々が、何らかの医療福祉施設で死を迎える今日、人間の死生の問題を語る時、スピリチュアルケアとは何かについて比較文化的視点から問う事は、重要課題の一つであると言えよう。しかしながら、日本においてはまず、スピリチュアルと言った時の語感や意味のレベルから検討を始めなくてはならない。

「スピリチュアル」というカタカナ言葉が、現代日本において言われるようになって久しい。例えば、ハワイへのエステ観光が「スピリチュアル」ツアーと銘打たれ、霊能者がテレビや雑誌で「スピリチュアル・カウンセラー」と宣伝される時、スピリチュアルという言葉によって強調されるのは、世俗化または心理化された、霊的・オカルト的側面である。

もう一つ、現代人に大きく関係のあるスピリチュアルな側面とは、医療福祉の文脈において関心を集めるようになって来た「スピリチュアルケア」である。ここで語られるスピリチュアルな側面とは、前述のそれとはまた違った文脈を有している。さらに、このスピリチュアルケアというものが、医療や福祉の現場における、ケアをする側と受ける側の双方からのニーズによって生じて来たという点は重要である。

本書評論文においては、近代ホスピス発祥の地として知られるイギリス、また宗教的多様性と資本主義との関わりからスピリチュアルケアを推進するアメリカの、特に看護の現場におけるスピリチュアルケアとその現状について、詳しく記された文献を紹介したい。執筆者達の背景は、神学、倫理、保健、看護と様々であるが、それぞれが医療と福祉の現場におけるスピリチュアルケアに、理論と実践の双方から関わっている研究者ばかりである。

最初に、ナラヤナセイミー（Aru NARAYANASAMY）による、『スピリチュアルケア：看護師と医療従事者の為の実践的ガイド』（*Spiritual Care: A Practical Guide For Nurses And Health Care Practitioners*）について、簡単な紹介を行ないたい。タイトルの通り、この本はケアの実践に携わる専門家達に向けた本である。更に第2版が出版されるにあたり、スピリチュアリティとスピリチュアルケアに関連する箇所がより多く組み込まれるようになったのが特徴である。その際に、例えば患者の心（mind）と身体（body）、そして精神（spirit：ここには精神、心、そして魂といった霊的なニュアンスも含まれている点は重要である）を看護するという様に、特に看護における全人的な取り組みの重要性が強調されている。

本書は、実践的な理解や利用が可能な方法によって、スピリチュアルケアの複合的な様相を、読者に系統立てて紹介するという試みを行なっている。

ここで重要な点は、現代イギリスにおけるスピリチュアルまたは宗教的な多元性についての評価が行なわれている点である。日本における医療看護系のガイドブックにおいて、果たして宗教的な要素に付いてどれだけの説明がなされるか、それを考えてみるだけでも、イギリスと日本における、この分野への宗教的様相の関わり方の違いが垣間見られよう。

特に本書は、異なる文化に属する患者を看護する為のモデルを提示しながら、スピリチュアルおよび文化的な背景の違いに焦点をあてる。このような具体的な事例検討を通じて、読者はスピリチュアルニーズというものが何かを理解する事が可能になるという訳である。また、医療におけるこの重要な領域において、今後どのように研究が発展していくのか、その概要に付いても本書は紹介している。こうして、基本的には現在主流と成りつつあるEBM（実証に基づく医療：Evidence-based medicineまたはEvidence-based practical approach）を、スピリチュアルケアの領域にも応用する事で、より系統だったスピリチュアルケアを紹介して行こうというのが、執筆者の目的の一つであると言えよう。

本書を執筆したアル・ナラヤナセイミーは、ノッティンガム大学のトリニティー・スピリチュアルケア・研究プロジェクトの研究員であり、倫理、また医療におけるスピリチュアル・文化的な要因について教えている。クイーンズ・メディカル・センターでは、文化を超えた医療についての名誉アドバイザーという仕事にも携わっており、元々の専門は一般看護と精神看護である。看護教育の発展に様々な機関で寄与して来た彼は、スピリチュアリティおよびスピリチュアルケアに関する様々な著書を出版している。

次に、コッブ（Mark COBB）による、『死にゆく魂：終末期におけるスピリチュアルケア』（*The Dying Soul: Spiritual Care At The End of Life*）に

ついて紹介したい。本書では、スピリチュアリティが重要な要素として考えられる、特に癌および緩和ケアの場面での、全人的医療モデルについての検討が行なわれている。ここでたてられる問いは、このようにして私達がスピリチュアリティと言う時に何を意味し、またスピリチュアルケアを具体的にどのように行なっていけば良いのか、というものである。この複雑な領域を理解し定義していくのが、本書の目的の一つである。

スピリチュアリティというものは、いったいどのように経験されまた表現されるのか。本書は、終末期の疾患が私達に与えるこのような影響についても、しっかりと見据えた記述を行なっている。著者は、死生に関わる重要な様相の一つとして、スピリチュアリティとは果たして理解可能なものであるのかどうか、また医療従事者がそのようなスピリチュアリティに対する継続的で効果的なアプローチを発展させていく事の重要性についても論じている。また著者は具体的な訓練や法律との兼ね合い等の、実践における諸問題とその重要性についても本書の中で明らかにしている。

著者であるコッブは、スピリチュアリティは従来、緩和ケアにおける第4の柱とされてきたが、理論と実践の両方において、しばしば検討とそれに基づく発展が他にくらべて十分ではない領域であった、と述べている。コッブ自身の医療現場での実践や教育の経験を反映しながら、本書はケアの場面におけるスピリチュアリティの概念、そして実践的な課題について探究している。

マーク・コッブはランカスター大学で学んだ後、英国教会の聖職者として叙任された。教区の聖職者および医療現場におけるチャプレンとして活動している彼は、特に緩和ケアについての活動を中心としている彼は、スピリチュアリティ、倫理および悲嘆について研究を行なっている。なお、コッブはシェフィールド大学医学部や、神学校等で教えながら、2002年にはシェフィ

ールド病院の臨床ディレクターに任命されている。

最後に、ウィルトとスマッカー（Dorothy L. WILT, Carol J. SMUCKER）による、『魂を看護する：応用スピリチュアルケアの技法と科学』（*Nursing The Spirit: The Art And Science Of Applying Spiritual Care*）について紹介をしたい。本書は、看護者が患者に対してどのようにスピリチュアルケアを行なうか、その実践的なガイドブックとして、アメリカ看護協会（American Nurses Association）により発行されている本である。

医療従事者達によるスピリチュアルケアの関心が高まっており、医療に関する認定委員会や看護プログラムにおいてもそれは同様である。医療や看護についての文献でも、スピリチュアルケア、スピリチュアルなものの評価や苦悩等、患者によるスピリチュアルなものへの関心についての指摘が多くなされるようになって来ている。心（mind）と身体（body）と精神（spirit）のケアをコーディネイトする役割を担う看護スタッフは、看護プランを立て、患者のスピリチュアルな強さを支え促進していく中心的役割を果たす。

その際に、心と身体のケアについての教育を良く受けた看護師であっても、全人的な精神（spirit）のケアへの視点は、しばしば欠如している事も多い。これについての学びをどのようにすれば良いのか。このような主旨の下、作成されたのが本書である。本書の特徴の一つは、スピリチュアリティという言葉を広く捉え、スピリチュアルケアを理解する事と、それをどのように適用するかという実践的なアプローチとを区分した上で、看護に携わる人達が、それぞれを現場で統合していくという事を目指している点である。

また、それぞれ異なる信仰を持つ看護スタッフの助けとなるように、信仰面でより開かれた（特定宗派に依拠しない用語を用いるという意味のようである）ことばを用いながら、患者のスピリチュアルニーズについて言及して

いる。これは患者側についてだけではなく、看護のスタッフの信仰のスタイルやその背景にある文化面の多様性に付いても示唆しているということであり、これが宗教的にも文化的にも多様な背景を持つ、アメリカで書かれた本であるということを改めて思い起こさせる部分である。

このようにして、スピリチュアルな面の評価、診断、治療計画の立案のみならず、看護スタッフ側の精神（spirit）的ケアについての方法も紹介している本書の特徴は、アメリカ全土の様々な立場の看護スタッフから集めた、豊富な事例やストーリーを検討している、ということである。このようなアプローチを取る事によって、実際に現場で働く看護のスタッフの疑問に答え、実用性に高いガイドブックとしても機能するという目的を、本書はうまく成り立たせていると言えよう。

ドロシー・ウィルトは、看護学分野を教育背景に持ち、また心理療法についても詳しく、看護について教えながら、結婚カウンセリングおよび家族カウンセリングなどの実践にも携わっている。本書は、テネシー大学ノックスビル校の看護学生に、スピリチュアルケアおよびホリスティックな看護を教えるコースの為の、実践的なガイドブックを作る必要性から生まれたものであるという。

共同執筆者のキャロル・スマッカーは、看護の資格と博士号（Ph.D.）を持ち、ノックスビルの東テネシー・バプティスト病院での教区看護プログラムのコーディネーターを担当していた。1986年より、彼女はこの教区看護プログラムの活動に関わって来ており、博士号を取得した論文のテーマは、スピリチュアルな苦悩や苦痛に関するものであった。同時に彼女は医療外科専門の看護師としての経験を始めとした、様々な看護分野での背景知識や経験を有しており、テネシー大学ノックスビル校では、看護学科の助教授も務めている。

以上の3冊は、イギリスとアメリカという英語圏を中心とした文献である事を、最初に記しておきたい。それぞれが、現代のスピリチュアリティをめぐる諸相を反映しているとも言える。それを例えば、医療化されたスピリチュアリティ、文化的・宗教的多様性を反映したスピリチュアリティ、そしてケアの実践との関わりの中から浮かび上がるスピリチュアリティ、と分けることも可能であろう。

そこでは、他の言語に翻訳されたときに浮かび上がるような、英語圏の歴史や文化に根ざした独自のスピリチュアリティ観が存在しうる。しかしながら、日本におけるスピリチュアリティ研究には、それが宗教学、医療看護等のどの分野であろうと、このような視点が大変薄いのが問題点としてあげられる。それは、ある種の神秘的な意味でのスピリチュアルな共通要素の存在を、文化的な装置をすべてはずしたその後に想定する場合も同様である。これを想定するか否かをめぐる、それぞれの異なる立場が共存しうるものであるのかどうかは、今後の研究論文の中で引き続き検討し述べていきたいと考える。

また英語圏ということから言えば、本稿にはさらにオーストラリア等でのスピリチュアルケアの現状といったものも含まれるべきであるが、それはまた次の機会に譲りたい。近代ホスピス発祥の地といわれるイギリス、また特に日本における医療看護の分野で強い影響力を持っているアメリカ。加えて、近年の英語の世界的レベルでの影響力も踏まえ、以上の2つの国を中心に文献を取り上げ、検討する事としたのであるが、アメリカとイギリスの社会状況、宗教および文化的背景の違いといったものが、それぞれの記述の端々から読み取る事が出来るのも、興味深くまた重要な点である。

イギリスからの強い影響を受けているオーストラリアの場合、イギリス的なホスピスやケアへの意識は高いが、spiritual careという名称よりも、より

キリスト教宗派の影響が色濃く残っている、pastoral careという表現の方が、保健機関の関連部署ではまだ多く残っているという状況がある。これは今後、オーストラリア原住民の人々をめぐる動向のみならず、オーストラリア国内における多様な文化背景を持つ国民の動向によって変化が予想される部分で、その兆しも既に出始めている。

アメリカにしても、アメリカのもっとも大きな病院チャプレンの認定組織であるACPE（臨床パストラル教育協会）が、その指針の中のキリスト教色の強い表現であるpastoral care（パストラルケア）という表現を、より多様性に即したspiritual care（スピリチュアルケア）というものに変えたのは、比較的近年の事であるというのも見のがせない。この組織の事については、『死生学研究』2003年春号および2004号春号の拙稿の中の記述に詳しくは譲る事として、宗教的および文化的多様性が、このようなスピリチュアルケアというものが出現して来る背景としては、重要なものであるという事が伺われよう。

このような流れが、それぞれの国の文化的・宗教的多元性から生じたものであるならば、その一方で存在している保守性とのバランスの取り方が、常にこのスピリチュアルケアというものを考える場合に重要な要素となって来る。例えば、現代アメリカにおいては、伝統的な道徳主義と宗教多元主義の、大きなぶつかり合いのようなものが生じている。ハーバード大学のダイアナ・エックがその著書*A New Religious America: How A "Christian Country" Has Become the World's Most Religiously Diverse Nation*の中で書いたように、異なる文化、異なる宗教、また異なる民族との共存共栄を目指すような、宗教的多元主義の風潮や傾向もそこには存在している。

その一方で、例えばアメリカを神の国と見るような保守派やキリスト教右派による、かれらによるところの道義的な明解さのようなものが強く支持さ

れているような側面も存在するのである。一般に、その文化的装置が取り外され、宗教的に中立的な印象がかもし出される、このスピリチュアリティという言葉から生まれている「スピリチュアルケア」というものにしても、当事者のニーズからのみならず、ある時はこのような時代の綱引きの中から生じて来ているものであるという事を、私達は認識しておくべきなのである。

本稿で紹介する3つの本において、執筆者がもっとも気になるのは、このような多元主義に基づく寛容性を基盤にした看護の理念と共に、スピリチュアルケアが提示されているという評価されるべき点と、実は果たしてそれは真にその役割を果たし切れているのであろうか、という点が存在するということである。どのように他宗教を信仰する他者への配慮をうたっても、そこに存在するのは世俗化または公共的に変容を遂げた、やはり国家レベルでの力を有した、多数の人達が信奉しているある特定の宗教の影ではないのだろうか。

例えば、近代ホスピスの母とも呼ばれるシシリー・ソンダースが、1967年に設立した聖クリストファー・ホスピスは、超教派のキリスト教財団として作られたものである。いかなる宗教的な信条を持つ人にも、また宗教を持たない人にも開放されているという宣言の下に作られたこのホスピスは、ソンダースの信念に基づいた画期的なものであった。

しかしながら、宗教的基盤と地域社会の問題は、ソンダースにとっては常に頭の痛い問題であった。正直な話、無宗派を認めて欲しいという申し出が、良心的に可能かどうか、本当のところは私にも分からない、と彼女は率直に認めている。英国国教会と関わりながらも、ある確立された宗教の秩序を持ち込みたくない、と考えていたソンダースにとっては、これは重要な問題であった。実際、病院内にいるチャプレンとは、その点でソンダースは常に緊張状態にあったという。つまり、宗教的な方針等については、チャプレンが

公式な代表者であるということが、全ての緊張関係の根源にあったようである。

ここで重要なのは、このように目に見えなくなった宗教性をめぐる課題である。つまり、世俗化・公共化したキリスト教は、例えばキリスト教ではないと言えるのであろうか。また個人レベルでの、可能な限りの文化装置を取り払った、そのようなある種の宗教性－スピリチュアリティーというものは、異なる宗教間のパワーゲームに巻き込まれた際に、どのくらいその自由なポジションを保証されるのであろうか。

ここで問題にしているのは、制度的な建て前のレベルの話ではなく、真に当事者の実感レベルでの話である。このような議論がなされないまま、スピリチュアルケアをまるで流行のもののようにして取り入れる事、それが執筆者の最も懸念する点の一つなのである。その上で、実際の現場では、そのようなケアのニーズは確かに存在する。この難解なパズル、しかもただのゲームではない、様々な人々の人生や生命のかかった、生きたこのパズルに、死生の問題に関わる全ての人達は、それぞれの持ち場で真剣に取り組む必要があるのではないだろうか。

以上、上述の3つの本を紹介した上で、今後のスピリチュアルケアのある射程について検討を試みた。日本における医療や看護、または医療社会学や医療人類学的なアプローチからのホスピス・ターミナルケア研究、緩和ケアまた在宅ホスピス研究等には、宗教的またはある種の宗教性・スピリチュアリティが関与する文脈に対する視点が不足する傾向がある。逆に、宗教研究者らによる同分野の研究には、伝統的な宗教教義の文脈を重視する余り、医療現場における現実や実践への基本的知識、当事者性への視点の欠如、または特定宗教の枠を超えた体験レベルでの理解が少ない場合がある。これは他のいわゆる文科系の学問を基盤に持ち、臨床に立ち位置のない研究者にも、

構造的な類似性が見られる。

また、キリスト教文化を背景に持つ欧米においては、病院やホスピスでのキリスト教的ケアの文脈は余りに日常的な前提であったので、従来ホスピスやターミナルケアについての研究の中には、比較文化や比較宗教的な視点が弱い場合が多かった。これには宗教またはより個人を中心としたスピリチュアルな事象に関する文化的・社会的背景の差異、および関わる人々の間の認識の違いが、かなり直接的に影響しているものと考えられる。

キリスト教的文化背景を伝統的に持たない日本人にとっては、医療化・世俗化されているとは言え、医療福祉におけるスピリチュアルケアには、依然として理解が難しい点も含まれる。本稿執筆によって、その導入の是非の検討も含めたスピリチュアルケア研究、またひいては死生学研究発展への一助となる事が出来れば幸いである。

(ふるさわ・ゆみ　東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)